

東洋大学国際地域学部留学生アンケートから

高橋直美*

1. 始めに

このアンケートは、10月に東洋大学国際地域学部の留学生に対して行ったもので、104名(男女各52名)の留学生の協力のもとに実施されたものである。

また、このアンケート一部をまとめたものは東洋大学レポートとして、11月10日に発表されている。

ここでは、アンケートの日本語に関する部分において、レポートの補足説明を日本語教師としての視点から行いたいと思う。

ちなみに、今回協力してくれた留学生の平均年齢は26.2歳、平均在日期间は2.7年である。

2. 日本の若者の流行語について

(1) 言葉の乱れ

「めっちゃ腹減ってしょうがねえからさあ、飯食いに行こうぜ。」

「あのクソオヤジさあ、チョーむかつくって感じ。」

電車の中で聞こえる女子高校生の会話である。このように男言葉をカッコイイと思って使用し、流行語を多用する若い女性が多くなっている。

そのため、留学生の日本語授業でも、

「『むかつく』ってなんですか。」

「『チョー』むかつくの『チョー』の品詞はなんですか。」

というような質問がよくでてくる。

日本語の授業では、男言葉(メシ、食う、腹減った等)は親しい男性(目上、親しくない人を除く)同士のときに使う乱暴な言葉であると学習する。決して女性が使う言葉ではない。それなのに、学校で国語を習っているはずの学生が、留学生は使わない不自然な会話を意識的に行っている。これは、外国人である留学生には大変奇異な現象であり、母国の代表として日本に留学している学生には、母国の文化・伝統を頭から否定するような浅はかな人間として認識されているのである。

アンケートを見ると、

*東洋大学国際地域学部; Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

- * とくに今の日本の中学校女子学生は、言葉の使い方は優しくないと言うより、全然気持ち悪いぐらいだと思っています。(26歳 男性)
- * 本来の日本語はすごいきれいな言葉だと思っています。しかし、最近の若者は日本語がどれだけきれいな言葉なのかを認識している人が少ないと思います。(21歳 女性)
- * きたないことばが多い。外国人にとって分かりにくいです。(27歳 女性)
- * 日本の若者の言葉は、日本語授業で学んだとは全然違うので、まったくわからない。(24歳 女性)
- * いきなり理解できない。(正しい意味を把握できない) (35歳 男性)

等、一般的な日本語と異なる言葉を話して困るという回答が多く見られる。

また、「あなた自身も日本の若者の流行語を使うことがありますか」という問いで、

- ① 「チョー～(イ・ナ形容詞) (チョーかわいい、チョーうまい等)
- ② 「(動詞・形容詞) みたいな」 (私がやるみたいな、良いみたいな)
- ③ 「わたし的には」 (彼的には、うち等的には)
- ④ 「ら抜き言葉」 (食べれない、着れない、見れない)

の各語についての使用頻度を聞いてみた。

「あなた自身が使う、日本の若者の流行語は？」についての頻度(%)は以下の通りである。

	よく使う	たまに使う	あまりつかわない	全くつかわない	無回答
……みたいな	24.0	35.6	22.1	15.4	2.9
チョー……	10.6	35.6	32.7	21.2	0.0
**的には	8.7	12.5	33.7	43.3	1.9

(「東洋大学レポート No64」より)

(2) 「チョー**」と「ら抜き言葉」について

ここで注意しなければならないのは、①「チョー～」と④「ら抜き言葉」に関しての留学生の言語認識である。

(A) 「チョー～」は意味がとりやすい。

* 「チョー」を「とても」とか「たいへん」に置き換えればよい。また、「超人」、「超特急」等、名詞について単語となっているため、留学生にも馴染みが深い言葉であり、使いやすと思われる。

(B) 「ら抜き言葉」は同音異義語があり、混同しやすく間違えやすい。

* 外国人の日本語学習では、通常でも可能の動詞の「ら」を抜いてしまう間違いがおり

やすい。例えば、「このはさみは切れない。」(切ることができない)と「この服は小さすぎて着られない。」(着ることができない)の「きる(切る・着る)」が混同しやすい。

また、「喋る」(SHABERU)と「食べる」(TABERU)という、類似の音の組み合わせから、「喋る」ことができるという「喋れる」と、「食べる」ことができる「食べられる」が一緒になって、「食べれる」という言葉を「食べる」の可能形として覚えてしまったということも考えられる。

以上のような外国語学習の落とし穴があるため、流行語云々を別にしても、他の二つの言葉よりは「チョー」と「ら抜き言葉」については、留学生が誤用してしまう可能性がいやでも高くなる。

(3) 「**みたいな」

この四つの例題の中で、特に注意しなければならないのは、「(動詞・形容詞)みたいな」使用である。

日本の若者の使用例としては、

- *あの子、いつも私は可愛いみたいな事言ってさあ。
- *今日は何やってもダメ(だ)みたいな、やんなっちゃうみたいなことばかりあって困ったよ。
- *彼、すぐにでもやりますみたいなこと言ってたけど、絶対にやらないよ。

等があげられる。

しかし、アンケートに答えた留学生が、上記のような使い方についてのみ回答したのかどうかについては疑問が残る。

例えば、「**みたいな」という言葉は、

- *私みたいなものでも何かのお役に立てればと思います。
- *馬鹿みたいね。
- *嘘みたいな話ですね。

のような正しい形で、ごく普通の会話にたびたび使われている。

この「**みたいな」の**の部分には体言や活用形の連体形につくので、

- *彼が自分でやるみたいなこと言っていましたよ。

は、正しい使用法となる。しかし、若者の使い方は、

- *彼が自分でやるからみたいな、あいつはばかだみたいなこと言っていたよ。

——自分でやるからいいというような、
あいつはばかだというような

* あの子、いつも私は可愛いみたいな事言ってさあ。

——可愛いというような、可愛いというふうな

* 今日は何やってもダメ(だ)みたいな、やんなっちゃうみたいなことばかりあって困ったよ。

——ダメな状態で、やんなっちゃうようなこと

* 彼、すぐにでもやりますみたいなこと言ってたけど、絶対にやらないよ。

——すぐにでもやるというようなこと

というように使用する。

若者の流行語では、終止形・言い切りの形に「みたいな」をつけ、「～というような」つまり、状態・様子をあらわす意味としてのみ使用し、しかも、相手に対して同意を意味をも含んでいるのだ。一般に、文末表現の「みたい」(**のようだ)の使用法としては、

* 彼は、本当にお腹が空いたみたいね。

* 北海道は雪が降ってとても寒いみたいね。

等、「らしい」の意味をもち、不確かな判断や推定をあらわす婉曲な言い方がある。(『広辞苑』「みたい」の項参照)

この使用法が、若者の流行語「みたい」の意味に近いと思われる。しかし、これは「みたい」であって「みたいな」ではない。

逆に言えば、このような言い換えが理解できてはじめて「～みたいな」の流行語の使用が可能になるのかもしれない。

アンケートでは、「～みたいな」は「よく使う 24.0%」「たまに使う 35.6%」を合わせると、59.6%もの留学生が普通に使用していることになる。

しかし、実際問題として、日本語学校及び大学その他の日本語教育では、流行語のような使用法は学習していない。「みたいな」はあくまでも、「君みたいな人」「熊みたいな犬」というように、比喩的な意味を取るもの、体言や活用形の連体形接続に限定して学習をしているはずである。

ゆえに、流行語的使用法である、文の終わりに付けて「～というようなこと」という使い方を本当に理解して流行語を使用しているかどうかは疑問である。

使用すると答えている留学生のなかには、文法の学習通りの使用をしているにも係わらず、慣用法と勘違いして使用していると答えた者がいる可能性も高い。

(4) 「**的には」について

一方、「***的には」について言えば、例えば、

- *わたしの的には、和食よか（より）イタメシが好きです。
- *彼的には、あんなことするなんて本意じゃないよね。

という使い方は、留学生にはほとんど使用不可能なようである。やはり、「***としては」という言葉の使用法が普通であり、「的」はあくまでも、「将来的には」「国際的には」という、広い視野に立って物事をみるという意味でのみ使用するに止まっている。「的」は本来、名詞に添えてその性質やその状態を表す意味であることと理解しているので、「**は」あるいは「**としては」としての意味合いで「**的には」という言葉は使用しないのであろう。

また、中国語で「**的……」という使い方があるが、それを日本語に訳すと助詞「の」にあたるため、助詞「には」をさらに付加することはしないのである。

留学生が日本語を学習するに当たって一番苦勞するのが文法、特に、助詞である。基本がよくわからない言葉の応用形を無理には使用しないのではないだろうか。反対に、基本から外れている言葉を使用されること自体、彼らには迷惑な話である。

- *辞書に載っていないことは、日本語を習っている外国人にとって困る。 (24歳 男性)
- *日本の若者の言葉やマナーもうめちゃくちゃになりました。意識混乱の状態になったんじゃないですか。 (28歳 男性)
- *めちゃくちゃになりました。 (31歳 男性)
- *文法によると、めちゃくちゃと思います。ぜんぜん聞き取れないです。
日本の若者はマナーが悪すぎます。皆、自己中心的です。 (29歳 男性)
- *日本の若者の言葉は、日本語授業で学んだこととは全然違うので、まったくわからない。 (24歳 女性)

(5) 表現の問題

また、このような文法的な乱れのほかに、表現上の問題も深刻となっており、留学生にとって、難しいと思う日本語が一層理解困難になってしまう。

一時問題となった、いわゆる「三語ちゃん」現象、つまり「え、嘘、本当」で会話をすませてしまう女子大生の言語感覚もその一例であろう。

- *何でも言葉を短くしすぎる。 (23歳 女性)

という意見もあった。

言葉が短いという点は、単に流行ということで片付ける訳には行かない。大学のレポート等を見

てもわかるように、語彙が少なく、特に、漢語は苦手のようなのである。

また、以下で示すように、言葉の正確な意味を把握していないことが多く、大まかな枠で括り、幾つかの言葉で全てを纏めてしまうことが多い。

例えば、RED、つまり「あか」という色について見てみる。

日本語で「あか」といえば、「赤」「紅」「朱」「緋」という漢字があてはまる。「赤」は総称であり、「紅」は鮮明な赤色、すなわちくれないのことをいい、「朱」は黄ばんだ赤色、「緋」は濃く明るい朱色、深紅色のことをいう。「赤光」(しゃっこう)、「口紅」「朱肉」「緋絨(ひおどし)」「(鎧の絨毛の一種)」というように使用される漢字は微妙な色具合によって異なる。

しかし、その微妙な色の違いを厳密に言い分けることはほとんどせず、概して「赤」でまとめてしまう。もっとも、桃色などとは言わずに、ピンクといい、また、外国風に、ローズピンク、サーモンピンク等と名詞を付けて同色の微妙な色分けをする西洋風な言い方が流行ってはいらるが。

しかし、色には文化が現れており、日本の色を西洋の色で全て言い表すことはできない。コナン・ドイルのシャーロック・ホームズ作品の題名は「緋色の研究」であって、「赤の研究」とは言わないし、宮崎駿の映画は「紅の豚」であって、「朱色の豚」とは言わない。それぞれ、「緋色」、「紅」以外の色ではイメージ・内容が全く異なってしまうからである。

また、例えば、姿が美しいことを「きれい」で纏めてしまうことが多いように、ものごとを形容する言葉の種類が全体的に少なくなっている。

ちなみに、「きれい」の他にも同様な言葉は、「うるわしい」「うつくしい」「秀麗な」「華麗な」「美麗な」等々いくつもあり、しかもその意味は少しずつ違っている。

また、若者の漢字離れが進む昨今、昨年の学期末試験で「苦悩」という漢字を約一割の日本人学生が「苦悩」と書いていた。

漢字は、表意文字であるという事実もある。そのため文字を見ればインスピレーションを感じ、単語の幅が殖えるという機能をも秘め、慣れると非常に便利な文字である。

もっとも、物事の形容には大和言葉を主としたものと漢語を主としたものがあるが、日本語では両方を組み合わせるため、言い方はいろいろである。

しかし、若者のボキャブラリー自体が減少しているため、その組み合わせも限られたものでしかない。語彙が少ない上、単語を繋げたような会話が多くなり、必要最小限の単語しか使用しなくなってきたため、外国語として日本語を学習する外国人には一層理解しにくくなっている。

例えば、「お茶でも飲みに行きませんか。」ということをし、「お茶する?」「お茶しない?」という。

このような短縮文は、また、流行語・新語の誕生とも深くかかわってくる。

TVのCMで「お茶づけ中」という紙が電話に貼ってあり、主人公がお茶づけを食べている最中のシーンが画面に流れる。この例でいけば、食事中といわないで、「カツ丼中」「ラーメン中」などという新語が続々と生まれてくる可能性が生じる。

しかし、この「カツ丼中」「ラーメン中」が誰にでもすぐに理解されるとは限らない。新語を理解

するには、その背景となるものを知らなければならないからである。

以心伝心という言葉があるが、それはあくまでも相手の心を理解できる人達のあいだで行えることであって、例えば、出会ったばかりの、しかも日本語をあまり理解できない外国人にとっては難しいことである。

ところで、

- ① 富士はきれいだ。
- ② 富士山は秀麗な姿をしている。
- ③ 富士の清らかな高嶺は麗しくも晴れやかに、厳かにそびえている。
- ④ 青雲にそびえる霊峰富士の秀麗な山容は、荘厳かつ日本の象徴としての美を秘めている。

上記の記述を見て、どの文章が富士山の容姿をわかりやすく形容しているだろうか。①は非常に簡潔であるが、どういうふうにかきれいなかがよくわからない。②③④と進むごとに形容が明確になっていく。しかし、漢字圏の人間であれば別だが、言葉自体が難しい。文字で見れば理解できる日本人でも、

- ④せいうんにそびえるれいほうふじのしゅうれいなさんようは、そうごんかつにほんのしょうちょうとしてのびをひめている。

と、耳で聞くだけでは理解に苦しむだろう。

そこで、もっと簡単な言葉を使って

- ⑤ 日本を代表する山である富士山は、すそ野が長く堂々として、しかも姿が美しいので皆に愛されている。
- ⑥ 富士山は日本で一番大きくてきれいな山なので、みんな好きです。

と言えば、耳から聞いても誰もがすぐに理解できる。

前述の留学生の「言葉が短い」という指摘は、物事を説明する、つまり、若者の作文の技術、特に説明的論述が未熟であるということに通じる。要するに日本語の会話及び文章表現が下手なのである。

(6) 流行と手本

ところで、よい文章を書くために必要なことは、良い文章に触れるということである。

赤ん坊が言葉を覚えるためには、親なり周りの人間の「手本」が絶対に必要となる。「手本」を真似ようとするのが、覚えること、つまり言葉の取得になる。密林で見つかったという「狼少女」

が言葉を理解できなかったというのは、「手本」となる人間がいなかったからに外ならない。

現代の若者は名作と言われる文学作品をあまり読まない。その代わりというわけではないが、マンガが文字文化の中心になっている。また、TVゲーム等の画面でも、会話文や簡略な説明文のみの使用となっている。

若者の言葉の短さは、マンガ等に見られる若者の文字文化が大きく影響している。

このマンガ等の影響は、言葉の長さだけでなく、「敬語」を使用しないことや、「タメ語（対等の会話）」の使用にも現れているように思われる。

中高生や大学生の読むようなマンガには、敬語を使用したり、詳しい状況説明や美しい形容を多用するような内容のものは多くない。日本で一番人気のある週刊誌（マンガ）で敬語が出てくるような話はほとんどない。なぜなら、敬語を使わなければならないような目上の登場人物環境設定がほとんどないからである。

逆に、マンガは時代の流行を敏感に取り入れたり、あるいは、流行を作ったりして若者の心を捕らえるため、より一層、単語文やタメ語形式を多く取り入れているのが現状である。

しかも、面白さとウケを狙ったものが多いため、いかに面白い言葉遣いにするか苦心し、その結果遊び感覚の言語認識につながってしまう。

また、TVでもキャッチコピーと銘打って、CMや番組で流行語を作ろうとしているが、これも受け狙いに走るあまり、美しい日本語を崩してしまっている。

また、留学生から見た日本の不思議な点は、大学生や大人が読む漫画文化にもある。中国人留学生も、韓国人留学生も読書と言えば文学書であり、漫画を読むということはほとんどないという。ゆえに、作文を書いても短文にはならない。かえって、一文が長すぎてしまうほうが多いのである。

また、今年の流行言葉に「おっはー」がある。これは幼児向けにつくられた「おはよう」の短縮語である。

この「おっはー」という言葉一つをとってみても、「おはよう」という言葉からの派生語だということがわからなければ、何の意味だか理解できない。

これもTV番組のなかで香取慎吾扮する“慎吾ママ”の「おはロック」が放映されてはじめて「おっはー」イコール「おはよう」の意味であると理解できる。ゆえに、この番組をしらない人が耳で聞いたとしたら「おっはー」を「ばっかー」と聞き間違えても不思議ではない。

反対に、TVをよく見る留学生は「おっはー」は知っているが、「オッス」という挨拶は知らない人もいる。「おす」と言えば「雄」か「押す」、あるいは「お酢」かなと思うだけである。

ただ、流行語は流行として、時代を反映していくものであり、その時だけのものであるため、その背景と使い方を知らなければ意味不明になる。

確かに、流行語はTV等のマスメディアで流布されているため、留学生の耳にも入りやすいし、友人、アルバイト先の若者との接触が留学生に流行語の存在を認識させるため身近なものであることはいぬない。

(7) 敬語と日本文化

しかし、その中でも、時代を超え、世代を超え、民族を超えてその言語の精神が通用する言葉として日本語の「敬語」を理解している留学生は多いようである。これは、アジアにおける儒教の影響、また、相手との人間関係の円満という視点から感じていることであるという。

一方、そのような敬語に関して、日本国内では大学の日本語教師から「敬語不要論」が出たこともあったように、不要だと感じている人がいる。その理由は、難しいから、人間関係に垣根ができてしまうからであるという。企業でも、上司が部下に敬語を使わせないで、「タメ語」で話す等、上下関係のをなくす努力をしている人がいるという。

以上のような国内事情とは反対に、特にアジアからきている留学生は、敬語を人間関係の潤滑油、相手に対する心遣いのあらわれとして尊重する人がかなり多く、「敬語」の学習が日本の心を知る手掛かりになるという留学生も少なくない。

外国人として、日本社会の閉鎖性に苦勞している人が多いため、どうにかして、人間関係をうまく成り立たせたいという願いが込められていることも事実である。

しかし、同じ精神文化圏の共有ということで、礼儀は留学生にとって自分と日本人との共通する部分でもあるのだ。

もっとも、

- | | |
|--|----------|
| * 変わってきた言葉が新しくて便利だと思う。 | (24歳 男性) |
| * 日本の若者はまだまだ言葉やマナーがよいほうだ。他の国はもっとひどすぎる。 | (27歳 男性) |
| * たしかにタメ語がしゃべりやすいとおもう。 | (27歳 男性) |
| * 別にマナーを守らなくてもいいと思う。 | (22歳 女性) |

という意見もあり逆に、日本の若者文化に理解を示す留学生もいた。

しかし、多くの留学生は敬語は日本の美德の現れであるからと、日常会話さえ難しいと言っている学生で、敬語習得に意欲を燃やしている人は非常に多い。

確かに、中国語にもハングルにも敬語は存在する。しかし、日本語のように謙譲語・丁寧語・尊敬語という立場ごとに、使用する言葉が大きく変化することではなく、相手に対して尊敬の念を込めて付加する言葉が多い。

留学生のアンケートをみると、多くの学生が「敬語」を若者が使わなくなったことについて遺憾の意を示している人が意見の大部分を占めていた。

一方で、今回のアンケートから「敬語」を考え、自分に対する思いやりや尊敬の念を相手に求める回答が多かったこともわかった。

同じ人間として、また、人生の先輩としての自分の存在を理解してほしいという思いが、日本の若者に対する留学生の真情ではないだろう。

留学生の一番の望みは日本人の友人をつくることである。しかし、現実には言葉の壁や、文化の違い、年齢の差等、何でも話せる友人を作ることはかなり難しいという。

アンケートの「何でも話し合える日本人の友達はいますか?」という問いに、過半数の留学生が「いない」と答えている。また、「いる」と答えた人でも、友人の数は一人か二人がほとんどであった。

言葉は人と人との最大のコミュニケーション手段である。言葉の使い方一つで、意思が思うように伝わらないのである。

例えば、同じ二人称を表す言葉であっても、「あなた」「きみ」「おまえ」「あんた」「てめえ」では言われた者の心に生ずる感情は全く異なる。見ず知らずの人間に「てめえ」といわれたら、因縁をつけられた、あるいは、悪者に絡まれたと思い、嫌な気がする。また、夫婦の中でも夫は妻を「お前」と呼ぶが、妻は夫のことを「あなた」と呼び、「お前」とは呼ばない。これは、封建制度から生じた家父長制度の名残りかもしれないが、夫は守るべき大切なものである妻に親しみを込めて「お前」と呼び、妻は夫に敬愛の念を込めて「あなた」と呼ぶというのが一般的な解釈である。

敬語とは確かに人間関係に上下を作る作用をもっているが、一方では、相手に尊敬・敬愛の念を抱き、心の垣根や距離を取り除く為に必要なものでもあるのだ。

敬語は相手との距離を置くものであるから、親近感が感じられないという人もいる。しかし、それはあくまでも表面的な問題であって、敬語を使用したから親密度が薄れるということにはならない。

例えば、店員が客に対して敬語を使うのは仕事だからである。これは、自分の立場を明確にすることで、職務や責任を自覚するということにもなる。また、尊敬の度合いを強めることにより、自らの尊敬の念の深さを相手に示すこともできる。

相手に自分の敬意を伝えようとわざわざ、「あなたを尊敬しています」などといわなくとも、例えば、「お先に失礼させていただきます」という言葉のなかには、相手をたてるという心遣いがはっきりと現れてくる。しかも、自分をおもてに出さない謙虚さが感じられ、言われた人も悪い気はしない。

『**させていただきます』は相手を尊敬し、自分を謙遜するから」(30歳 男性)という意見もあった。

(8) 留学生の好きな言葉

内容を留学生のアンケートにもどすと、あなたが一番好きな日本語はどんな言葉ですかという問いに対して一番多かった回答は「頑張ってください」「頑張れ」という言葉で、全回答者の一割強の14名が答えていた。

その理由としては「やる気が高まる」「勇気が出る」「自分が日本に来てよく頑張っているから」「前向き」ということであった。

また、「愛」「好き」「思いやり」「大丈夫」「よくできました」「おかげさまで」「お元気ですか」「お

疲れさまでした」「よろしくお願いします」「ありがとう」「すみません」「どうも」「ごめんください」「失礼します」「はい」等も複数の回答者がいた。

中でも、「ありがとう」「すみません」「よろしくお願いします」が各4名ずつで、理由としてはそれぞれ「親しく感じる」「人に気をつかうから」「この言葉で言われると尊敬されていると感じるから」等であり、自分を認められたと感じる言葉が留学生の好きな言葉であることが理解できる。

また、「好き」と答えた人は「好きこそ仲良くなれる」「好きと言われたいから」と回答し、孤独な留学生活のなかで、友人を求めている寂しさを感じさせる。

また、実用性や自己の心情は重視せず、単に「発音がきれいだから」「心が安らぐ」からとして「なつかしい」、「おだやか」等、耳で聞いた音や言葉の意味に重点をおいて考えた学生も二人いた。

興味深いところでは、「かわいい」という言葉は「ブスでもかわいいといえどごまかせるから」、「すっぱー」は「使い方が簡単だから」、「はい」は「実用的」と、言葉の実用性に重点をおき、使い道の便利な言葉を選んだ学生が何人もいたことである。

「おかげさまで」は「謙虚な美德を感じるから」と、日本語の特徴的な言葉に興味を抱き、言葉から日本の文化を考えようとした人もいた。

アンケートの結果をみると、留学生の好きな言葉というのは、日常会話で使用する言葉で、自分が言われると嬉しい言葉、つまり、実生活の中で心情的に求めている事を言葉にしたものが一番多かったことになる。

反対に、「努力」「平和」「希望」という抽象的な言葉は、各一名ずつでありあまり人気がないようである。また、「適当」「習うより慣れろ」という、人生訓のような座右の銘も各一人ずつで、留学生には馴染みのない言葉のようである。人生訓のような言葉は日本語学校の学習ではあまり取り入れられていないのかもしれない。

留学生の言葉はあくまでも、相手とのコミュニケーション手段であることが第一義で、いかに相手と巧く交流が出来、自分の気持ちが伝えられるかにかかっている。これは、外国での生活を余儀なくされた者の宿命のようなものであろうか。

一方、母国を離れ、家族や友人と離れた外国人が、他国で生きていく厳しさ・辛さ・寂しさが好きな言葉のなかに込められているように思われる。

また、日本という単一民族国家で外国人として生活していく疎外感、自己を認めてほしいという希望が、「敬語」を求める一つの理由ともなっているような気がした。

(9) まとめ

今回のアンケートでは、若者言葉の難易、言葉の乱れということもさることながら、言葉のなかにその国の文化を見だし、その国の文化を尊重する留学生の真摯な態度を見ることができた。

また、言葉を人間関係の重要なファクターとして、敬語に相手に対する愛情や理解を求めようとする寂しい外国人の姿をかいま見ることもできた。

現代の若者の言葉には確かに相手との距離や感性はない。しかし、話し方の距離の無さと、心情

的な距離とは全く別物であると考える。

合コンで意気投合する若者、アイドルのコンサートで仲間意識を確認する若者、イライラしたからと全く見ず知らずの人を襲う若者、人と人との境界が必要以上になくなった反面、相手や他人を無視し、自分勝手な行為に走る若者をみるにつけ、「タメ語」が情動的に親しいとか、「敬語」が距離感を与えとかそういう価値観では今日の人間関係は把握できないような気がする。かえって、敬語的敬愛心の表出が相手に対して好印象を与え、関係が良くなるように思えてくるのである。

以上のことから、若者の自由な発想が、国や民族の枠を外し、日本語を乱すような言葉ではなく、死語に新しい息吹をあたえるような流行語をつくる活力となるように、この辺でもう一度日本語の再確認をすることが必要ではないだろうか。

言葉のもつ精神性は、人と人との結びつきに欠かせないものである。外国人が他国に来て一番大切なのはその国の言語であり、伝統・文化の理解である。日本が知りたくて留学した外国人学生が失望しないような、文化の保守と創造が重要である。

A Survey of Foreign Students of International Regional Development Studies

Naomi TAKAHASHI

Enquete shows that most students abroad have not a good impression of the fashionable expression which Japanese young men use.

Moreover they don't like to use above expression, because they "love the beauty of Japanese language". The students abroad often criticize the expression of Japanese young men in Japanese language: they can't use the polite language, or, have any sympathy for the other, in spite of the language shaping the human relations.

And, the students abroad like "GANBATTE KUDASAI" in Japanese. Most of them have few intimate friend of Japan with whom they can talk about everything at home.

The student abroad seem to look for the conscience of Japanese in good old days, interested in the new technology of today's Japan.